慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	技術の進歩と労働者心理学の問題 : E.D. Smith, Techonology and Labor, A Study of the Human Problems of Labor Saving, 1939.
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.3 (1940. 3) ,p.449(127)- 454(132)
JaLC DOI	10.14991/001.19400301-0127
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400301-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

技術の進歩と勞働者心理學の問題

——E. D. Smith, Techonology and Labor, A Study of the Human Problems of Labor Saving, 1939.——

藤林敬三

從來、人間の勞働に關する各種の實踐科學的研究は、單に勞働の能率增進の視角から、勞働從つてまた勞働者を研究の對象としながら、眞に人間の問題を見逃してゐた。勞働能率論の對象とせられる勞働者は、眞に人間ではなくして、恰かも作業を營む一つの道具であり、また機械であるといふやうに觀られてゐた。そして今日でも未だ、このやうな見解が殘存することは、否定し得ない所である。しかしたとへ勞働能率論の立場からするにしても、その研究は當然、それが科學的に問題の追及を怠らない限り、結局勞働の人間問題に到達しなければならないものである。そしてこのことは、近年に於ける勞働能率論の發展に就いて、見られる一つの一般的な傾向であるが、それはまた特に最近のアメリカの學界に、著しく現はれて來てゐる一つの望ましい傾向でもある。即ち、アメリカに於いて既に稍々廣く發展した人物處理、換言すれば、經營に於ける人事管理の問題は、勞働者が單に道具や機械ではなくて人間である、といふ見方に於いて一歩を進めたものであつた。そしてこの見方が驅てペンシルヴェニア大學

の R. B. Hersey 教授の研究と、更らにハーヴァード大學の E. Mayo 教授の見解の內に強く現はれてゐることは、私が既に數年前に本誌上に紹介して置いた所である。（註）これ等に對して、昨年イェール大學の The Institut of Human Relations の公刊書の一つとして、同大學の E. D. Smith 教授（Professor of Industrial Relations）の、「技術と勞働、勞働節約の人間的諸問題の一研究」といふ一書を得たことは、從來の能率心理學から勞働者心理學への研究の轉換を示すものとして、吾々はこの書の存在を看過し得ないであらう。

（註）ハルシイの研究に就いては、本誌第三十卷第十號、メィヨーの見解に就いては本誌第二十八卷第四號に於ける、私の紹介文を參照せられたし。尙ほアメリカに於ける勞働者心理學的研究と見解とは、單にこの兩者に限られるのではなく、この外にも多少とも見るべきものは存してゐる。しかしそれ等に就いては何れまとめて論評し得る機會もあらうと思ふが、唯だ一つ此處で序に次ぎのことだけを、讀者にお傳へして置きたい。それは經營に於ける人間問題の研究に關しては、メィヨーの影響が非常に大きいといふことである。本誌一月號に小高教授が紹介して居られる J. J. Gillespie の「合理的產業經營の諸原理」の如きもその一例であるが、メィヨーの最も大きな影響は、彼の弟子であり、また彼の協力者である T. N. Whitehead 教授の研究である。即ち、彼の著作は左記の二書であるが、共に勞働者心理學の吾々の立場からも、それは當然見逃し得ない興味ある研究である。

1) Leadership in a Free Society, A Study in Human Relations based on an Analysis of Present-Day Industrial Civilization, 1936.

2) The Industrial Worker, A Statistical Study of Human Relations in a Group of Manual Workers, 1938.

近代產業の技術的發展の一つの特徵は、勞働の節約 Labor-saving にある。しかもこれはまた往々にして勞働苦惱と勞働不安を釀し出す所以となり、從つて勞働者は一般に勞働節約的技術の更改を懼れる。そしてこの勞働の不安は時に技術的進歩の重大な障害となる。其處で技術のこの進歩を實現することは、同時に或はそれに依つて生ずることのある勞働不安を取り除き、勞働者保護の方策を確立することを必要とする。このために此處に吾々は、技術の進歩に伴ふ人間的諸問題を充分に理解することが必要である。私が此處に紹介しようとするスミスの著作は、このやうな問題を取り擧げたものである。しかし勞働節約的技術の進歩は種々の形態を採つて現はれるし、また生產の種類の異なるに從つて多樣多岐である。其處でスミスの問題はこのためにある種の生產過程の技術進歩に限られたのである。即ち、彼の研究は專ら棉織工場に於ける技術の改良に依る、各勞働者の受持ち織機臺數の增加 the multiple loom or extended labor system ——勞働者側では the stretch-out と呼ばれるもの——の場合に關聯して、十八の織布工場に就いて、數年間に亙る詳細な觀察研究の結果に基づいてゐる。私は次ぎに、このスミスの研究が勞働者心理學の一研究として持つ諸種の特質を、指摘して見たいと思ふ。

先づスミスの研究が實踐的な一つの方向を持つてゐることが指摘されねばならない。即ち、技術の改良に依る勞働不安、勞働者の動搖と勞働爭議の發生、この望ましからざる摩擦を未前に防がうといふのが、彼の實踐的意圖である。しかしそれは一方では人事管理の問題として、管理の側の注意を促すものであり、同時に他方では、それは技術の改良に對する勞働者の態度を問題とし、受持織機臺數の增加といふ勞働の客觀的一條件の變化に對する、勞働者の順應の態度を重要視してゐる。そしてこの點では一般に、勞働者問題に關心を有する第三者の興味に訴へやうとするものである。

このやうな實踐的な立場から、スミスは技術の改變を實施するに際しての、多くの實際的方策を提言するものであるが、この實踐的な方策を提言するまでに、彼が執つた問題の科學的理解が、更らに吾々に甚だ興味のある所で

ある。いふまでもなく彼の問題の中心は、勞働の客觀的な一條件の變化に對應する勞働者の態度の如何にあるが、この點に就いて彼が吾々に敎へる基本的な見解は、次ぎの一事に存すると見ていゝやうである。即ち、管理者も勞働者も共に長年の間に、自ら「適當な勞働條件と適正な一日の仕事がどのやうなものであるかに關して、慣習的な判斷を持つやうになつて居り」、從つて「作業速度は確定せられて了つてゐる」。そして「このやうな判斷の習慣と作業の習慣とが一つの慣習的な情態 status quo を確立し、これが勞働者と管理の活動を導くことは、充分の思慮を以つてするよりも遙かに有力である」。勞働を包むこの慣習的な status quo に關する右のやうな認識に、スミスの多くの問題がかけられてゐるといつていゝ。即ち、作業の一條件の變化が、それが假令へ些細な事柄であるにしても、この慣習的な情態との間に適合關係が成立するまでは、多少の程度の勞働不安を伴ふことは、必然豫想せられることである。勿論この工場內の、勞働者を動かしてゐる慣習的な情態は、確固不動のものではないが、その現狀維持的な作用を吾々は輕視することは出來ない。

スミスが、一つの工場に特有な、勞働者を支配するある慣習的な情態の存在することを認めてゐることは、吾々の勞働者心理學の立場から見て、彼の所論中最も重要な點であるといはなければならない。しかし乍ら、彼自身の論述してゐる所から見ると、彼は必ずしもこの點を中心に一切の問題を發展せしめてゐるとは思はれない。從つてまたこの點に關する彼の所論は、吾々の希望を充分充す程に詳細に展開せられてはゐない。例へば、彼は一方では右の慣習的な情態の存在を認めながら、他方では別にまた勞働者の氣風 morale を問題として取り擧げてゐる。しかもこの兩者の關聯などは、全く彼の顧みる所とはなつてゐないのである。勿論吾々のやうに勞働者心理學の存在を豫定してゐないと思はれる彼の努力に對して、私が此處にこのやうな希望や批評を述べることは、元來不適當のやうにも見へるかも知れない。しかし彼の提供してゐる問題は、確かに吾々の見逃し得ない、しかも甚だ興味のある認識であつて、更らに吾々はこれに對して環境心理學的、或は生活心理學的理解を深めることに依つて、其處から吾々は勞働者心理學の一つの基本的な問題を展開して行くことが出來る筈である。この意味に於いて、私はスミスの努力が勞働者心理學に對する一つの貢獻として、尙ほ充分の價値を持つものであることを認めて置きたい。

最後に、私はスミスの研究を成立せしめた方法に就いて簡單に述べて置きたい。先きに述べて置いたやうに、彼の研究は十八の織布工場に於ける、各勞働者の受持ち織機臺數の增加を實施した技術的變化に對應して、現はれた勞働者の態度を中心問題としてゐる。しかもこの問題は元來甚だしく複雜であり、また微妙であり、更らに個性的でもあつて、單純な考察に於いては、充分よくその眞相を摑み得ないものである。このやうな對象の性質に關する自覺から、其處に採用せられた方法は一つの綜合的研究方法である。即ち、工場の客觀的諸條件の觀察は素より、經營の諸種の記錄、作業の直接的觀察、勞働者及び下級管理者に對する口頭質問、勞働組合の存する場合には、その指導者の意見をも聽取し、また組合の諸記錄を利用し、更らに爭議の發生した場合には、第三者——例へば地方新聞——の觀察と意見とを考慮することを忘れなかつた。しかも十八工場中の十工場に就いては、特にこれ等の方法を以つてする詳細な觀察が行はれ、時にはその觀察は數ケ年間に亙つて行はれ、事態の推移が詳細に考察せられたのであつた。このやうに出來るだけ綜合的な研究方法が採用せられたにも拘らず、スミスは觀察素材の統計的な處理を拒否してゐる。それは一方では複雜微妙な對象の性質に基づき、他方では觀察工場の少數であつたことを理由としてゐる。そして彼のいふ所に依れば、この研究の範圍內に於いて、若し統計的方法を用ひたとすれば、主たる問題は看過せられたであらうと考へられてゐる。從つてそれは一つの事例研究 a case study であり、數量的に

ではなく、個々の場合の質的な研究であると見做されてゐる。このためにスミスの著作は、右の研究方法に於いて得られた多様の研究素材に關する、彼の單に質的な科學的理解から成つてゐる。そしてこれが彼の著しい特色を與へてゐる。しかし乍ら、勞働者心理學の立場から觀れば、吾々は單にこの種の事例研究だけに滿足し得ないものであつて、適當に統計的方法を援用すべきは勿論である。しかもスミスがこの方法の援用を避けてゐることは、勿論彼の問題に對する科學的態度の愼重さを示すものであると見得る。しかし尙ほ吾々はこの科學的態度の愼重さの外に、これと並んで統計的な方法の有用をさう簡單には否定し得ない。

以上簡單に指摘したやうに、スミスの研究の問題の中心が既に勞働者心理學の問題として甚だ興味あるものであり、また彼が綜合的な方法に基づく事例研究を行つてゐることは、勞働者心理學の立場からは未だ多少希望すべき點はあるにしても、彼の意圖の如何を問はず、それは確かに勞働者心理學のための一つの研究であると見做していゝものである。このやうに考へると、アメリカの學界には先きにハーシイ、メイヨーあり、今またホワイトヘッドとスミスの研究が公にせられてゐて、しかもこれ等の研究と見解とは共に、大體勞働者心理學への重要な貢獻であると見做され得るものである。從つて私はこのアメリカ學界に於けるこれ等の有力な指導者達の學問的興味から、聽ては勞働者心理學が獨自の存在を要求せられることのあるのを期待する。そしてこの種の學問的興味を有する者が、勞働者心理學の存在を豫定することは、更らに彼等の個別的な研究をより有効なものとし、また學問的にも問題の所在を一層よく把持せしめ得る所以であると考へられる。かくて私が此處に擧げたスミスの研究は、他のものと同樣に、それが個別的研究であるだけに、學問の發展に於ける一つの過渡期的な色彩を帶びてゐる。しかもこれは寧ろ當然である。

（昭和十五年二月十日稿）

西原雄次郎著『藤山雷太傳』

高橋誠一郎

本書は昭和十三年十二月十九日を以つて七十六年の生涯を閉ぢた日本糖業界の巨人藤山雷太氏の一週忌を記念するが爲めに嗣子愛一郎氏によつて上梓せられたものであつて、編者は二十餘年の久しきに亙つて故人に親炙せる同社囑託、兼、日東化學工業會社監査役西原雄次郎氏である。

藤山氏は我が集權的封建制度の最末期、鎖國經濟時代の崩壞期に生を享け、我が國民經濟の成立期に人と爲り、我が資本主義の躍進的發展時代の潮流に乘じ、波瀾重疊の生涯を營み、遂に一代にしてよく「陶朱公も遙かに及ばざる富を築き」上げた財界の偉人である。編者の言を以つてすれば、氏が必傳の價値ある所以は「其の時代の兒たり、時代の産物たり、時代の代表者たる點」に在る。而して、編者西原氏は、明治三十五年二月、慶應義塾普通部生として義塾の課せる懸賞試文『品性論』に應募し、甲賞を授けられてより文名學内に高く、同四十一年優秀なる成績を以つて同大學部理財科を卒業して後、住友銀行、時事新報社等を經て、大日本製糖株式會社に入り、長く藤山氏の側近に侍せる能文の人である。今や老熟して平淡の境地に入れる西原氏の才筆によつて、藤山氏の多彩絢爛なる一生は「誇張の字句」なく、「浮華の趣」なく、躍如として吾人の前に現れる。

西原雄次郎著『藤山雷太傳』